

# ガリラヤを巡り歩かれたイエシュア

【聖書箇所】 マタイの福音書 4 章 23～25 節、5 章 1～2 節

## ベレーシート

●イエシュアはナザレからガリラヤ湖畔のカペナウムに移り住み、そこを拠点としてガリラヤの町や村の全土を巡り、宣教活動をしたことが 4 章 23～25 節に記されています。「教える」「宣べ伝える」「直す(いやす)」という三つの働きがなされました。まずは、その箇所を見てみましょう。

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書 4 章 23～25 節

23 イエスはガリラヤ全土を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民の中のあらゆる病気、あらゆるわずらいを直された。

24 イエスのうわさはシリア全体に広まった。それで人々は、さまざまな病気や痛みを苦しむ病人、悪霊につかれた人、てんかんの人、中風の人などをみな、みもとに連れて来た。イエスは彼らをいやされた。

25 こうしてガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤおよびヨルダンの向こう岸から大ぜいの群衆がイエスにつき従った。

## 1. イエシュアの公生涯における三つの働き

●今回の聖書箇所である 4 章 23～25 節には、以下に見られるように、五つの動詞があります。

- ① イエシュアがガリラヤ全土を「巡る」「巡り歩く」(「アコリユーセオー」 ἀκολουθέω)の未完了形。
- ② イエシュアの評判がどんどん「広まる」(「アペルコマイ」 ἀπέρχομαι)のアオリスト。
- ③ 人々が多くの病人たちをイエシュアのもとに「連れてくる」(「プロスフェロー」 προσφέρω)のアオリスト。
- ④ イエシュアは多くの病人を「いやす」(「セラペウオー」 θεραπεύω)のアオリスト。
- ⑤ 大勢の群衆がイエシュアに「つき従う」(「アコリユーセオー」 ἀκολουθέω)のアオリスト。

●これら五つの動詞の中で最も重要なのは、4 章 23 節にあるガリラヤ全土を「巡る、巡り歩く」(「アコリユーセオー」 ἀκολουθέω)という未完了形動詞です。つまり、イエシュアはガリラヤ全土を次々と巡り歩き続けられたのです。その「巡り歩き」の中でなされたことが 23 節に三つの現在分詞で記されています。つまり、イエシュアの活動は、右図のように三つにまとめられます。



### (1) 会堂で「教える」こと

●会堂とはシナゴーク(「スナゴーゲー」 συναγωγή)のことで、離散し

たユダヤ人たちの成人男性が 10 名以上集まるならば、会堂を建てることができました。会堂はユダヤ人の礼拝や教育の中心的役割を果たしていました。イエシュアは当時の律法学者たちの慣習に従い、会堂で教えられました。その振る舞いは律法学者たちと変わることはありませんでしたが、多くの人々はイエシュアの教えに驚きました。それはイエシュアが律法学者のようではなく、権威ある者のように教えられたからです。イエシュアの教えの特徴は当時の律法学者たちの伝統的なトーラーの解釈に対して、批判的、かつ挑戦的な解釈だったからです。「教える」という動詞「ディダスコー」(διδάσκω)は、特に「山上の説教」に見られるように、トーラーの真の解釈(新しい解釈)と結びついています。それは人々の意表をつくスキャンダルな解釈であったのです。しかし、イエシュアのトーラーに対する新しい解釈は、「御国の福音」を理解する上できわめて密接な関係がありました。

## (2) 御国の福音を「宣べ伝える」こと

●イエシュアの働き第二は、御国の福音を「宣べ伝える」(「ケーリュツソー」κηρύσσω)ことでした。それは今日に言う「宣教」とか「伝道」という働きです。それは旧約の預言者たちが前もって預言していたことであり、メシアの到来による良いおとずれの内容とするものでした。だれにとって良いおとずれなのかと言えば、一義的には御国の民、すなわちイスラエルの民です。マタイ 15 章 24 節でイエシュアは、「わたしは、イスラエルの家の滅びた羊以外のところには遣わされていません。」と語っています。

●後に、「目からうろこのようなものが落ちて」、新しく生まれ変わったパウロが最初にしたことは、諸会堂で「イエスは神の子であると宣べ伝え(κηρύσσω)」始めたことでした。と同時に、彼は「イエスがキリストであることを証明して」(使徒 9:22)、ユダヤ人たちをうろたえさせました。「証明する」という動詞は「スンビバゾー」(συμβιβάζω)で、聖書を通して論証することを意味します。この動詞は使徒の働き 16 章 10 節「パウロがこの幻を見たとき、私たちはただちにマケドニアへ出かけることにした。神が私たちを招いて、彼らに福音を宣べさせるのだ、と確信したからである。」という箇所でも用いられています。行き詰まりの状況も含めた様々な事柄から、神の導きを「確信した」という意味で使われています。同様に、イエシュアがキリストであることを、旧約聖書の様々な箇所を結び合わせ、比較し、調べて論証し、結論を出すということにパウロは特別に秀でていたのです。まさに、宣教と教育は車の両輪と言えます。

## (3) あらゆる病氣、あらゆるわずらいを「直す」こと

●イエシュアの働き第三は「直す」ことでした。新約聖書で「病氣をいやす」(「セラペウオー」θεραπεύω)という語彙を最も多く使っているのはマタイです。新約 40 回のうち、マタイは 16 回使っています。次いでマルコが 5 回、ルカは 14 回、ヨハネは 1 回、使徒は 5 回、黙示録は 2 回です。新約聖書には医療用語として「イオーマイ」(ἰάομαι)があります。「セラペウオー」(θεραπεύω)と「イオーマイ」(ἰάομαι)の違いは、前者が医療的行為を行って病人に仕えるのに対し、後者は病氣を治療することを第一義としています。「イオーマイ」(ἰάομαι)は、新約 26 回のうち、ルカ文書が 15 回と最も多く(福音書 11 回、使徒の働き 4 回)、次いでマタイが 4 回となっています。ルカが医者であったことを思わせます。

●イエシュアの場合、あらゆる種類の病氣、あらゆるわずらいをいやし続けることを通して人々に仕えたのです。

ただし、マタイの場合、異邦人のいやしは 8 章 5～13 節と 15 章 21～28 節の二箇所しかありません。それはイエシュアが、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊以外のところには遣わされていません。」(マタイ 15:24) ということをマタイは強調しているからです。

●ところで、「病氣」(「ノス」 νόσος)と「わずらい」(「マラキア」 μαλακία)は、どう違うのでしょうか。宮平望氏は「ノス」を「わずらい」と訳し、「マラキア」を「病氣」と訳しています。つまり、「ノス」は心の病との結び付きが強い表現で、「マラキア」は元々柔らかいという意味であり、病弱者と解釈しています。いずれにしても、現代のように医学が発達していない時代には、どのような病氣であっても死に直結する不安が強かったはず。しかし、やがて御国が実現する時には、どんな病であっても一瞬にしていやされることをイエシュアはデモンストレーションしているのです。

●イエシュアの奇蹟と教えはすべて「御国の福音」にかかわるものであり、しかもきわめて預言的です。たとえばその意味を尋ね求めなければその意味するところが分からないように、奇蹟も同様にその意味を知るためには自ら尋ね求めなければならないのです。なぜなら、奇蹟には多分に奥義が隠されているからです。ですから、表面的に理解してはなりません。目に見えない御国の奥義が隠されているからです。

## 2. 拡大されたイエシュアの働き

### (1) ガリラヤから北方面、南方面への広がり

●イエシュアの評判はガリラヤからシリア全体へ広がりました。つまりイスラエルの北方(北東地方)全体です。さらに、ガリラヤ湖南方のデカポリス、ユダヤ、エルサレム、ヨルダンの向こう岸へと広がり、そこに住む人々がイエシュアにつき従ったのでした。ただし、マタイはサマリアについて言及していません。おそらく、マタイの福音書がユダヤ人向けに書かれた福音書だからかもしれません。



### (2) イエシュアにつき従った民衆

●25 節で「つき従った」と訳された語彙は「アコリュセオー」(ἀκολουθέω)のアオリストです。この語彙の概念は「従順」です。主と主に従う弟子のかかわりを意味します。この動詞は 90 回使われていますが、そのうちの 25 回をマタイが使っています。ちなみに、マルコは 18 回、ルカ 18 回、ヨハネは 19 回です。マタイではこの語彙を弟子として召した漁師たちにも使っています。以下のように、4 章 20, 22, 25 節だけでも 3 回見ることかができます。

- ① 20 節「彼らはすぐに網を捨てて従った。」
- ② 22 節「彼らはすぐに舟も父も残してイエスに従った。」
- ③ 25 節「こうしてガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤおよびヨルダンの向こう岸から大ぜいの群衆がイエスに

つき従った。」

●「アコリュースオー」(ἀκολουθέω)は、イエシュアの後をただついて行くという幾分軽い意味から、十字架を負って死に至るまで従うという重い意味までを包括しています。イエシュアは、この違いをいろいろな場で、表現を変えながら、真に従うとはどういうことかを語っています。例えば、以下の箇所がそうです。

①マタイ 7章 13節【新改訳改訂第3版】

狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこから入って行く者が多いのです。

②マタイ 16章 24～25節【新改訳改訂第3版】

24 それから、イエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。

25 いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを見いだすのです。

③マタイ 22章 4節【新改訳改訂第3版】

招待される者は多いが、選ばれる者は少ないのです。

### 3. 「山上の説教」の舞台設定に隠された神の秘密

●マタイの福音書 5章～7章は「山上の説教」というまとまった説教になっています。神の「トーラー」には、モーセ五書と言われる「創世記」「出エジプト記」「レビ記」「民数記」「申命記」があるように、マタイの福音書にもまとまった五つの説教が公生涯の出来事の中にサンドイッチのように置かれています。「山上の説教」がその最初の説教です。今回は、その説教が語られた舞台設定を取り上げます。聖書箇所は 5章 1～2節です。

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書 5章 1～2節

1 この群衆を見て、イエスは山に登り、おすわりになると、弟子たちがみもとに来た。

2 そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて、言われた。

●この箇所のどこに神の秘密が隠されているのだろうと、いぶかしく思われる方もいるかもしれませんが。私もこれまでには特に意味があるとは思っておりませんでした。ところが、この箇所をヘブル的視点から読み解くとき、これまでとはまったく異なった舞台設定が見えてくるのです。少し、言葉の整理をしておきましょう。1節の構文は、「この群衆を見て、イエスは山に登り」で一旦文章としては切れているのです。つまり、イエシュアは自分について来る群衆を見て、山に登ったということです。「見て、登った」というなんの変哲もないイエシュアの行為の中に、御国の福音が隠されているのです。

●まず、「見て」と訳されたギリシア語は動詞の「ホラオー」(ὁράω)のアオリスト分詞(「エイドン」είδον)が使われています。～に向く、～の方を眺める、つまり視覚として目で見たとものを見る、一見するという意味では

「ブレポー」(βλέπω)を使い、一方、見た結果として知る、分かる、味わうなどの意味合いが入るときには、「ホラオー」(ὁράω)を使うようです。この「見たとき」をヘブル語にすると、「ラーアー」(הִרְאָה)の分詞がそれに当てられます。この「ラーアー」の初出箇所は創世記1章4節で、そこには「神は光を見て良しとされた。神は光とやみとを区別された。」とあります。ここの「光」は私たちの目に見える光源としての「光」ではなく、神のご計画、みこころ、御旨、目的を含んだ概念です。それを神は「見て良しとされた」というのです。つまり、神のご計画という視点からイエシュアは群衆をご覧になられたと言えないでしょうか。もしそう言えるなら、そこからイエシュアが山に登らなければならない必然性が見えてくるのです。

●「おすわりになる」も同様に、「カスイゾー」(καθίζω)の分詞で「座ったとき」という意味になり、そこにイエシュアの弟子たちが「近寄って来た」(「プロセルコマイ」προσερχομαι のアオリスト)と続いています。繰り返しますが、1節は二つの行為が区切られているのです。つまり、「群衆を見て、イエシュアは山に登った」とこと、「イエシュアが座っていると、弟子たちが近寄って来た」とことを、区別して理解する必要があるのです。なぜなら、「山に登る」とこと、「座る」とことは密接につながっていますが、事柄としては別だからです。

●私たちは、5章1節の「この群衆を見て、イエスは山に登り、おすわりになると、弟子たちがみもとに来た。」という箇所に特別な思いを抱くことはほとんどないのではないかと思います。さらに、2節の「そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて、言われた。」も同様です。なぜ、ここに神の秘密があると言えるのでしょうか？どんなにギリシア語を調べてみても、あるいは、どんな翻訳を見ても分からないのです。しかし5章1~2節の表現は、ヘブル語にすることによって初めて見えて来るのです。このことは、マタイの福音書の原文がヘブル語で書かれているということを暗に示しているとも考えられます。

●イエシュアは「この群衆を見て」とあります。この「群衆」とは、その前(4:25)に記されている「ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤおよびヨルダンの向こう岸」から集まってきた大ぜいの群衆のことです。イエシュアは彼らのニーズに答えた後に、山に登っています。なぜイエシュアは「山」に登られたのでしょうか。「山」がどこの山なのか一切説明されていませんが、おそらく、「山」はイエシュアが一人になって祈ることのできる格好の場所だったと言えます。一人になって祈れる場所は「山」だけでなく、「寂しい所」もその一つでした(マルコ1:35)。また「朝早くまだ暗いうちに起きる」ということも、一人になれる最高の時でした。事実、イエシュアはしばしば山や寂しいところに退き、一人になって過ごすことを常としていました。それは働きによる疲れをいやすだけでなく、御父とともに過ごすためでした。しかしこうした解釈では、イエシュアが「この群衆を見て、山に登った」という必然性は脆弱です。

●**イエシュアのすべての行為(行動)には意味があると信じます。**ヘブル的視点から見るとそのことが良く理解できます。ここでのヘブル的視点とは、ギリシア語をヘブル語に戻して解釈してみるということの意味しています。そこで、ここから「山」「登る」「座る」「弟子」という一つひとつのことばを、ヘブル的視点から見て行くことにしたいと思います。

## (1) 「山」

●聖書における「山」は、神の啓示の場であることがしばしばです。アブラハムはモリヤの山で愛するひとり子のイサクをささげるように命じられます。そこでアブラハムは神のヴィジョンを見せられます(創世記 22:2,14)。モーセは神の山ホレブで主と出会い、神の民をエジプトから救い出すことを命じられます。また、エジプトを出た神の民のために神の律法を受け取る場所も同じくシナイ山でした。預言者エリヤは同じ場所で彼の後継者について語られています。イエシュアはヘルモン山で変貌し、本来の神の本当の姿を一時ですが現わします(マタイ 17:2)。また、弟子たちに対するイエシュアの大宣教命令もガリラヤの山でなされています(マタイ 28:16~20)。また聖書においては、「山」はしばしば「エルサレム」を意味します(マタイ 5:14)。

●詩篇 24 篇 3 節で、ダビデは「だれが、【主】の山に登りえようか。だれが、その聖なる所に立ちえようか。」とあります。このダビデの問いかけは、メシアであるイエシュアを預言的に指し示しているのです。

## (2) 「登る」という行為

●イエシュアが山に登るという行為は預言的です。ヘブル語で「登る、上る」という動詞は「アーラー」(עָלָה)ですが、この動詞は単に「登る」という意味の他に、「(いけにえを)ささげる」とか、「反芻する」という意味があります。「反芻する」動物はきよい動物であり、全焼のいけにえや罪のいけにえとして祭壇にささげられる牛や羊です。つまり、イエシュアが「山に登る」という行為は、やがて聖なる山エルサレムにおいて、神にささげられる神の小羊イエシュアを預言的に象徴していると言えます。

## (3) 「座る」という行為

●群衆をご覧になったとき、イエシュアは「山」に登られました。そしてイエシュアが「おすわりになると」、弟子たちがみもとに来たと記されています。正確には「おすわりになったとき」(分詞アオリスト)、弟子たちが近づいて来たのです。「おすわりになる」とは、「着座された」という意味です。それをヘブル語にすると「ヤーシャヴ」(יָשַׁב)になります。「ヤーシャヴ」という動詞には、単に腰を下ろして「座る」という意味だけでなく、主の家に「とどまる、住む」という親しい交わりの概念があります(詩篇 23:6)。

●詩篇 15 篇 1 節で、ダビデは「主よ。だれがあなたの幕屋に宿るのでしょうか。だれが、あなたの聖なる山に住むのでしょうか。」と問いかけていますが、これは王なるメシアであるイエシュアによって実現します。腰をおろして座るという意味のギリシア語「カスイゾー」(καθίζω)という語彙からは決して見えてこない真理が、ヘブル語に戻すことで見えてきます。ちなみに、マタイの福音書はもともとヘブル語で書かれたと主張するフランスの学者(クロード・トレスモンタン著「ヘブライ人キリスト」参照)もいます(ヘブル語の原本は今のところ発見されていませんが、ヘブル語でなければ意味をなさない表現が多々あることを、彼はその本の中で指摘しています)。

●イエシュアが山に登って、おすわりになっているところに、弟子たちがみもとにやって来たという一連の動きと、その弟子たちに対して御国の憲章をイエシュアが口を開いて語り出したというつながりの中に、神のご計画



における預言的な意味が隠されています。つまり、イエシュアが再臨され、王なるメシアとして、聖なる山エルサレムを中心とした御国(統治、王国=千年王国)を治められます。その御国における憲章が、3節以降で、山上の説教として語られるのです。その憲章は、エレミヤが預言した新しい契約に基づくものであり、神の霊によって主の律法が心書き記された者でなくては、とても守ることのできない憲章です。「天の御国は近づいた」とあるように、それはすでにイエシュアの来臨によってはじまっているのです。

#### (4) 「弟子」という語彙の概念

●イエシュアが山に登り、おすわりになったあと、そこに弟子たちがみもとに来たとあります。ここで初めて「弟子」(「マセーテース」μαθητής)という語彙が登場します。「マセーテース」(μαθητής)とは、本来「学者」という意味で、「教師」(先生、師)に対応する語彙です。ただし70人(LXX)訳聖書では使われていません。ということは、「弟子」という語彙は新約聖書で使われる新しい概念を持った語彙だということです。ヘブル語では語源となる「ラーマド」(למד)がそれに相当しますが、この語彙は「学ぶ」という意味と、「教える」という意味の両方が含まれています。

●「弟子」(「マセーテース」μαθητής)という言葉は、マタイの福音書5章1節ではじめて登場します。そして、最後の章である28章19節では「あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。」とあります。「弟子」という語彙は新約聖書で261回使われていますが、四つの福音書と使徒の働きにしか使われていません。パウロ書簡では「しもべ」(「ドゥーロス」δοῦλος)、「仕える者」(「ディアコノス」διάκονος)という語彙を好んで使っています。つまり、主人としもべという関係です。またマルコとルカは、弟子たちの中から選ばれた12弟子に対して「使徒」(「アポストロス」ἀπόστολος)という語彙を使っています(マルコ6:30、ルカ6:13)。いずれにしても、「弟子となること」と「弟子を訓練すること」は、いつの時代においても重要なテーマです。イエシュアが公生涯の始めから、弟子たちと寝食を共にすることで、師としての「模範・手本」を彼らに示し、彼らを訓練しようとしておられたことは明白です。なぜなら、弟子たちはやがて御国の福音の告知とその内実を教え、あかしする者たちだからです。

愛の関係	御父—御子
	神—神の子
働きの関係	神—メシア
	神—使徒
	主—しもべ
	師—弟子

#### (5) 「口を開いて、語る」とは

●2節に、「そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて、言われた。」とあります。一見、当たり前のように思える表現ですが、ヘブル的視点から見ると、当たり前でなくなるのです。イエシュアが口を開く前の状態(公生涯に入る前まで)は、主のみおしえである「トーラー」が常に瞑想されており、イエシュアの心には神のみおしえが絶えず反芻されていることを考えなければなりません。その延長線上において、口を開くことで、主のみおしえがあふれ流れるようにして出て来たことをイメージしてみてください。

●イエシュアは『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。』と書いてある。』と言われました(マタイ4:4)。これをヨハネ版にしますと、「なくなる食物(朽ちる食物)のためではなく、いつま

でも保ち、永遠のいのちに至る食物のために働きなさい。それこそ、人の子があなたがたに与えものです。この人の子を父すなわち神が認証されたからです。」(ヨハネ 6:27)となります。このことを悟った者がはじめて、主の祈りの中にある「日ごとの糧をきょうもお与えください。」(マタイ 6:11、ルカ 11:3)と祈ることができるのです。ちなみに、この主の祈りは「御国が来る」ことを祈る祈りです。その御国が実現(完成)するとき、その来るべき日には必要欠くべからざる神のことばによって生かしてくださいという祈りなのです。神が与えようとするパンは御国においてそこに生きる者たちに必要な神のことばなのです。今やそのことばがイエシュアの口を通して発せられようとしているのです。それがマタイ 5章 2節の「口を開いて、語る」という意味です。

●3節から始まる「幸いなことよ」を意味するギリシア語の「マカリオイ」(Μακάριοι)は、詩篇の「アシュレー」(אֲשֻׁרֵי)に相当します。詩篇 1 篇の冒頭は「アシュレー・ハーイーシュ」(אֲשֻׁרֵי הָאֵיֶשׁ)です。その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさんでいます。この「口ずさむ」と訳された「ハーガー」(הָגָה)は瞑想用語の一つであり、常にその人のうちで主のおしえが反芻されているのです。この「ハーガー」(הָגָה)が詩篇 2 篇にも登場します。それは神に逆らう者たちに対して使われており、彼らの口から出て来るのは「つぶやき」なのです。それは彼らの心の中にある思いが言葉となって出てきたものです。私たちの口から出てくることばも、往々にして心の中にあるものが出て来るということを考えるならば理解できると思います。

●詩篇 1 篇の「幸いなのは、その人」(「アシュレー・ハーイーシュ」 אֲשֻׁרֵי הָאֵיֶשׁ)は、神の御子イエシュアのことを預言的に語っています(ヨハネ 5:39)。この方こそ天の御国の福音を私たちに教えてくれる方です。イエシュアは 30 歳にして公生涯を始められますが、それまでの長い期間、心の中に反芻していた御国の秘密を伝えるために、今や初めてイエシュアが口を開かれたのだと考えるならば、何とエキサイティングなことでしょうか。イエシュアの心の中で長い間反芻されてきたものが、今や口からあふれ出て来るのです。それはつぶやきではなく、人々にいのちをもたらすみおしえであり、まさに「御国の福音」なのです。私たちはその教えに対し、耳を開いて理解する必要があるのです。なぜなら、以下のように語られているからです。

【新改訳改訂第3版】詩篇 78 篇 1~4 節

- 1 私の民よ。私の教えを耳に入れ、私の口のことばに耳を傾けよ。
- 2 私は、口を開いて、たとえ話を語り、昔からのなぞを物語ろう。
- 3 それは、私たちが聞いて、知っていること、私たちの先祖が語ってくれたこと。
- 4 それを私たちは彼らの子孫に隠さず、後の時代に語り告げよう。

●1~2 節は、イエシュアを通して完結しています。イエシュアの語った「たとえ」は、私たちが人に良く理解できるように用いる例話とは異なります。それは「天の御国」における秘密であり、奥義です。ですから、イエシュアのたとえにある「なぞ」に関心を示し、その意味について尋ね求めることが許されている者こそ、イエシュアの弟子の資格でした。それゆえ、イエシュアの弟子となる者たちは「問いかけ」なければなりません。もし、御子イエシュアの語られた「たとえ」話の真意を尋ね求めなければ、なぞが解かれることはないのです。「求めなさい。それすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます。」とイエシュアは言われました。尋ね求める者に、御父は聖霊という方を賜物として与えて下さいます。なぜならこの聖霊なる方の助けによってはじめて私たちは「昔からのなぞ」を悟ることができるからです。 2017.1.29